

あとがき

我が国のアワビ類資源は、特に暖流系アワビ類の生息海域において、再生産による個体群の維持が困難な水準にまで資源量が低下し、危機的な状況に陥っている。

本書では、我が国におけるアワビ類資源およびアワビ漁業の抱える問題点を可能な限り網羅し、採りうる解決策について包括的な検討を加えた。しかしながら、資源が減少した原因を特定できる事例は極めて少なく、漁業および密漁による親資源の乱獲、海洋環境変動による幼稚貝死亡率の増大、さらに磯焼けによる餌料環境の悪化など、再生産過程の各所において資源回復の阻害要因が生じて悪循環に陥っているものとみられる。また、放流貝の混入率（漁獲物に占める放流貝の割合）は天然資源の凋落傾向を反映して多くの地域で高めに推移しており、一部の海域では90%を越えるなど異様に高い混入率となっている。このことは、放流貝は漁獲の上では一定の役割を果たしているものの、再生産ポテンシャルの底上げによる天然資源の再生という観点からは効果を発現していないことを示している。

一方、地球温暖化など、広域の海洋生態系の変化がもたらしている影響の評価は現状では極めて困難であり、今後の大きな課題である。アワビ類資源のみを管理するのではなく、海洋環境の変化に適応しつつ岩礁生態系全体を管理・保護する観点が必要であり、こうした視点からの研究の進展が待たれる。さらに、我が国においてアワビ漁業が行われている地域の多くは小規模な漁村集落であり、そうした地域では漁業者の高齢化、過疎化が進んでいる。アワビ漁業そのものを維持するためには、漁村集落の活性化など、社会全体での取り組みが必要である。

我が国におけるアワビ類の資源管理や増殖対策は、これまで多くの都道府県水産試験研究機関の研究者らの精力的な調査努力と漁業者への普及啓蒙によって培われてきたし、今後もそうあり続けることに疑念の余地は全く無い。本書は、そうした「アワビを増やそう、アワビ漁業を守ろう」と日々努力し続けている関係者らに利用・応用されることを目的に編集された。研究にはアカデミズムが不可欠であるが、さらに漁業現場への適用を図るうえでより厳しい洗練が必要である。本書をきっかけに、全国のアワビ類資源について闊達な議論が展開されることを切望する次第である。

平成30年2月

国立研究開発法人水産研究・教育機構 中央水産研究所
堀井豊充